

専門教育における留学生の口頭発表(2) 使用言語について

古本裕子・早川幸子・島弘子・三浦香苗

I はじめに

日本語予備教育の最終目的は、留学生が大学院で研究するのに支障がない日本語を身につけさせることである。留学生が専門教育の場で必要とする日本語については、仁科(1991)、庄司(1994)、尾崎(1994, 1996, 1998)などで調査が行われてきた。村上(1998)、黒野(1994)、小林(1994)は、留学生の日本での研究生生活に不可欠なものとして、「日本語で講義や発表を聴く」に次いで「日本語で質疑・応答をする」「(ゼミなどで)日本語で発表する」「日本語でディスカッションをする」があげられるとしている。これらのすべてがゼミや学会での口頭発表と関係を持つ要素であるにもかかわらず、口頭発表についての調査はまだ少ない。専門教育の場でどのような口頭発表がなされているのか、実際に日本語が必要とされているのか、それは専門分野によって違うか、指導教官の指導はどのようになされているかなどについて、日本語教師が詳しく知る必要がある(三浦 1998)。

これらについて調査するために、1998年夏に金沢大学で留学生を指導している専門の教官(194名)にアンケートを行った。調査の詳細と、教官の指導についての分析結果は「専門教育における留学生の口頭発表(1)指導について」三浦他(1999)にまとめられている。本研究では、留学生が専門教育の場で行っている口頭発表を、使用している言語の側面から明らかにする。

II 目 的

留学生の口頭発表の以下のような項目に焦点を当てて調査し分析する。

- 1 ゼミ、卒論・修論、学会の口頭発表の回数や時間はどのくらいか。
- 2 指導教官が留学生を指導するときに使用している言語は何か。
- 3 留学生はゼミ、卒論・修論、学会の口頭発表でどのような言語を使用しているか。
- 4 留学生が卒論・修論の口頭発表で使用する言語を選ぶのに、どのような要因が関係しているか。
- 5 指導教官は留学生がゼミ、卒論・修論、学会の各口頭発表でどのような言語を使

用することを希望しているか。

6 上記の結果は文系・理系で差があるか。学部間で差があるか。

III 調査の方法と回答者

調査の方法と回答者である指導教官については、三浦他(1999)を参照されたい。アンケートでは指導教官に指導生である留学生一人一人の日本語力や口頭発表の言語、その留学生に対する指導言語などを尋ねた。その結果、指導教官133人から留学生256人についての情報を得た。留学生についての詳しい情報は「2.1 情報を得られた留学生について」で述べる。

IV 結果と考察

最初に口頭発表の回数や時間的な側面の実態を明らかにする。後に、口頭発表の言語的な側面、つまり発表にどのような言語が使われているかを分析する。

1. 口頭発表の実態

ここでは、口頭発表の実態を、ゼミ、卒論・修論発表、学会発表の3つの場面に分け、公式度の低いゼミから高い学会発表の順にまとめる。

1) ゼミの口頭発表の実態

アンケートの回答では、ゼミの発表と質疑の時間を合わせて一コマ(90分)で納まる場合が多かったが、中には一回のゼミに5・6時間以上もかかるというものや、その時その時で違うので簡単に答えることができないというものもあった。得られた数値も非常にばらつきの大きいものであった。

文系と理系¹⁾とを比較すると、ゼミの回数や時間に有意差は見られないが、質疑応答の時間は文系の方が理系より長い($P < 0.01$, Mann-Whitney's U Test, 表1)。

ゼミでは、学生は専門書を訳読したり、いろいろな研究論文を紹介したり、自分の研究を発表したりするなど、その内容は一様ではなく各専門・指導教官によって違う。また、それに要する時間もその時の内容や指導される留学生によって違うため、ばらつきが大きいのであろう。

しかし、平均すると年間8.5回のゼミが行われ、発表の時間も質疑応答の時間も決して短いとは言えず、学生はゼミ発表に多くのエネルギーを使わなければならないことが分かった。

表1 ゼミの口頭発表の実態(文系・理系の差)

	ゼミ回数			ゼミ時間			ゼミ質疑応答時間		
	文系	理系	全体	文系	理系	全体	文系	理系	全体
回答数	33	71	108	28	72	104	27	67	98
平均	7.1回	9.1回	8.5回	40.0分	35.9分	36.6分	30.6分	18.8分	22.3分
標準偏差	11.2	9.3	9.8	21.2	29.2	26.8	21.5	15.0	17.8
文系・理系の差	有意差なし			有意差なし			P<0.01		

2) 卒論・修論の口頭発表の実態

卒論・修論の口頭発表は回答した指導教官108人の78.7%が行われているとしているが、この割合は理系のほうが文系より高かった(P<0.01, χ^2 検定, 表2)。卒論・修論発表がないというのは、卒業研究が課題となっていて卒論・修論がない場合や、論文は書くが口頭発表がない場合である²⁾。

発表時間の長さは文系(26.2分)のほうが理系(20.8分)より長い³⁾が、有意の差はない。質疑応答については文系が長い(いずれもP<0.01, Mann-Whitney's U Test)。

表2 卒論・修論の口頭発表の実態(文系・理系の差)

	卒論・修論発表の有無			回答数	卒論・修論発表の時間			卒論・修論の質疑の時間		
	文系	理系	全体		文系	理系	全体	文系	理系	全体
回答数	31	77	108	回答数	15	69	87	14	68	85
発表有りの数	17人	68人	85人	平均	26.2分	20.8分	22.7分	14.3分	9.5分	11.4分
割合	54.8%	88.3%	78.7%	標準偏差	15.1	9.6	12.1	6.5	6.2	9.4
文系・理系の差	P<0.01			有意差なし			P<0.01			

3) 学会の口頭発表の実態

学会の口頭発表の回数は、理系が文系よりわずかに多いという傾向があるが、いずれにしても年に1・2回といったところである。発表時間は文系は、卒論・修論発表と同じくらいの時間であるが、理系は短く両者には差があった(P<0.01)。質疑応答時間も文系が理系のおよそ2倍で有意差があった(P<0.01, いずれもMann-Whitney's U Test, 表3)。

表3 学会の口頭発表の実態（文系・理系の差）

	学会回数			学会時間			学会質疑応答時間		
	文系	理系	全体	文系	理系	全体	文系	理系	全体
回答数	14	68	85	11	67	80	11	64	77
平均	1.0回	1.4回	1.4回	24.5分	12.1分	13.7分	10.0分	4.7分	5.4分
標準偏差	0.6	0.7	0.7	9.1	3.6	6.4	2.2	1.9	2.7
文系・理系の差	P=0.05（傾向あり）			P<0.01			P<0.01		

学会と一口にいても、短い時間に多くの人が発表する学会や、選ばれた少人数が発表する学会といったように、いろいろな種類がある。10分以内に発表する場合と、25分間も発表する場合は、発表の構成の仕方或使用する資料の種類など、非常に違った戦略が必要とされるであろう。

4) 口頭発表の実態のまとめ

この節では、ゼミ、卒論・修論発表、学会の回数や時間などを調査し、以下のようなことが分かった。

- 1 ゼミの回数・時間は教官によってばらつきが大きい。質疑の時間は文系の方が長かった。
- 2 卒論・修論発表はしない人もかなりいる。質疑の時間は文系の方が長かった。
- 3 学会発表回数は理系が多い傾向があり、発表時間と質疑時間は文系が長い。

2. 口頭発表の使用言語の実態

ここでは、口頭発表に使用されている言語について見ていく。まず、指導教官が判断した留学生の日本語力を分析する。その後、指導に当たる教官の使用している言語を見た上で、卒論・修論発表で使われている言語が何かを見る。そして、そこで使われる言語と、学生の専門、学生の身分、指導教官の希望する発表言語といった他の要因との関係を観察する。最後に、ゼミ、卒論・修論、学会発表という3つの発表場面について、指導教官の希望する言語や、実際に使われている言語の違いを観察する。

1) 情報を得られた留学生について

情報を得られた留学生は、256人で、国籍は28ヶ国であった。分析のため、出身圏によって漢字圏と非漢字圏の二つのグループに分けた。

漢字圏：173人(中国153人・韓国16人・台湾4人)

非漢字圏：83人(マレーシア13人・バングラデッシュ11人・ロシア11人・インドネシア6人・タイ6人・エジプト6人・アメリカ4人・フランス3人・イギリス3人・ルーマニア2人・ブラジル2人・ガーナ2人・チュニジア2人・スリランカ 以下1人・フィリピン・ベトナム・イタリア・フィンランド・ブルガリア・ポーランド・ラトビア・アイルランド・ニュージーランド・パナマ・ペルー)

身分は、大学院後期 113人(44.1%)、大学院前期 54人(21.1%)、その他(学部生、研究生、専攻生、日本語・日本文化研修生、教員研修生、短期留学生) 89人(34.8%)である。なお、医学研究科の学生は全員大学院後期とした。

指導教官の専門から判断すると、情報が得られた留学生の専門は、医学系55人(21.5%)、教育学32人(12.5%)、経済学22人(8.6%)、文学20人(7.8%)、法学19人(7.4%)、薬学8人(3.1%)、理学18人(7.0%)である。文系理系の別は、文系78人(30.7%)、理系160人(62.5%)、その他または不明が18人(7.0%)であった。

2) 指導教官が判断する留学生の日本語力

留学生一人一人の日本語力を、指導教官の判断によって「上手」、「まあまあ」、「下手」、という3段階で判定してもらった。その結果、留学生(回答数231人)の40.7%が「上手」、37.2%が「まあまあ」、22.1%が「下手」と判断された。この結果が留学生の客観的な日本語レベルを表しているわけではない。しかし、留学生の77.9%が「上手」または「まあまあ」と思われているというのは、留学生の日本語力がある程度指導教官の満足のいくものとなっていることを示している。

一方、この結果は同時に行った、アンケート質問19「留学生の問題点」の回答の分析結果と矛盾する点がある。質問19で留学生の日本語力が低いことを問題点としてあげているのは、自分が担当する留学生の日本語力が「上手」と判断した指導教官の47.1%、「まあまあ」と判断した指導教官の66.7%、「下手」と判断した教官の75.6%である。「下手」と判断される留学生の指導教官のほうが、他のレベルよりもこのことを問題と考えているという点は頷ける。しかし、質問19の結果からは指導教官が留学生の日本語力に満足していないということが浮き彫りにされているのである。

つまり、ここで指導教官が判断し、答えている日本語力は単に日常生活を支障なく送るための日本語力で、研究生活で使える日本語力はまた別であった可能性がある。特に「まあまあ」というレベルは高度な研究をするのに十分なものではないと解釈していいだろう。

a. 留学生の日本語力の文理差

留学生の専門が文系か理系によって、指導教官が判定する日本語力に差があるかを見る(図1)。この場合、留学生の日本語力と、文系・理系別の両方のデータがそろっている、215名のみ分析の対象とした。その結果、留学生の日本語力は、文系のほうが理系よりも上と判定される率が高いことがわかった($P < 0.01$, χ^2 検定)。

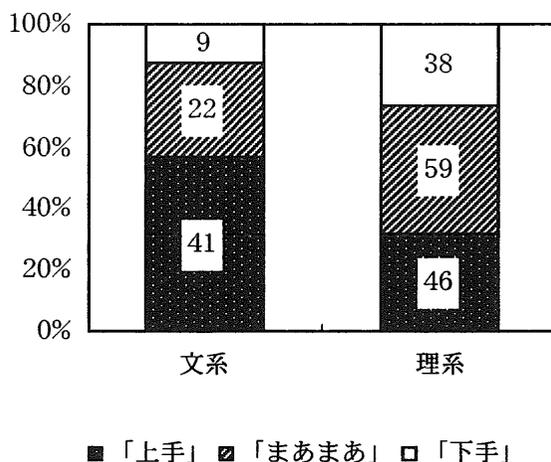


図1 指導教官の判断による留学生の日本語力(文理差)

b. 留学生の日本語力の専門分野による差

指導教官が判断する日本語力は、専門によって違いがあった(図2, データのそろった231人の分析, $P < 0.05$, Kruskal-Wallis rank test)。文学・法学が専門の人は日本語が「上手」な人が多く、理学部は少ない。

各学部の留学生の非漢字圏出身者の割合を調べると、理学部(72.2%)が特に多く、そのことが留学生の日本語力と関係しているかもしれない。しかし上記の日本語力は、指導教官の専門によって判断する基準が違える可能性もあり、留学生の実際の日本語力との比較をしなければならない。

c. 留学生の日本語力の出身地による差

漢字圏出身³⁾の留学生と非漢字圏出身の留学生の日本語力に差があるかどうかをデータのそろっている231名について調べた(図3)。漢字圏の学生は非漢字圏の学生と比べて「上手」の割合が多く、「下手」の割合が少ないことがわかった($P < 0.01$, χ^2 検定)。

日本語の習得にとって、漢字の障壁は大きいものがあるが、特に専門書を読みこ

なすためには漢字の力が不可欠である。この点で、漢字圏出身者は非漢字圏出身者に比べ、非常に有利な立場にある。指導教官の判定にもそれが現れていると言えよう。

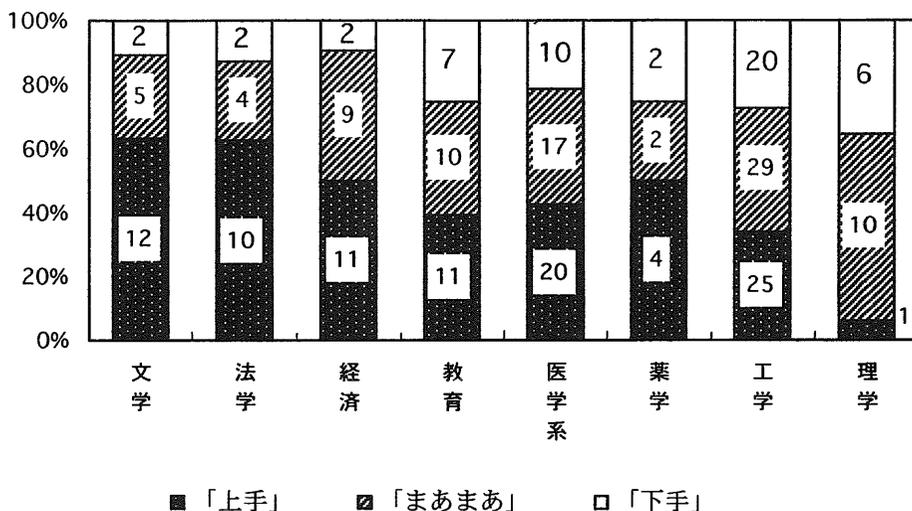


図2 指導教官の判断による留学生の日本語力(学部差)

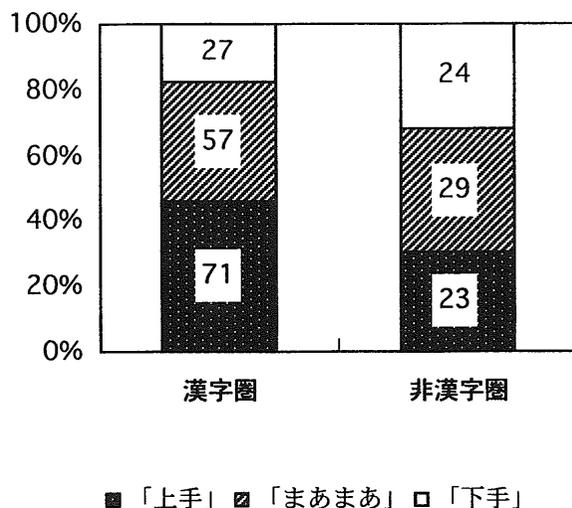


図3 指導教官の判断による日本語力(漢字圏と非漢字圏の差)

d. 留学生の日本語力の身分による差

留学生の身分による日本語力の差を見るために、大学院後期・大学院前期・その他の学生の日本語力をまとめたが(231名分、図4)、身分によって日本語力に差があるとは言えなかった(χ^2 検定)。

留学生の来日の経緯は、学部生からずっと日本に滞在し学年が上がっていくパターン、日本に1年だけいるパターン、大学院から日本に来るパターンなどいろいろある。日本語・日本文化研修生は日本に1年だけいる学生だが、日本語を専攻している学生であるから日本語力は一般に高い。また、大学院後期になって来日する学生もいるが、これらの学生は一般に年齢も高く、日本語学習歴が短い。その上、日本語学習に時間を割くことができないことから日本語力が低い場合も多い。留学生の身分と日本語力の関係が低い理由にはこのような学生の日本語学習歴の違いが関係しているだろう。

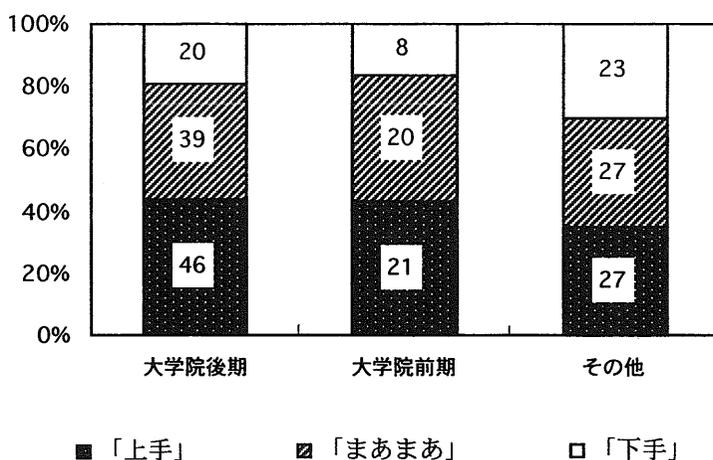


図4 指導教官の判断による日本語力（身分による差）

e. 留学生の日本語力のまとめ

この節では、指導教官の判断による留学生の日本語力について分析をしたが、次のことが分かった。

- 1 全体的には日本語力は「上手」または「まあまあ」と判断されることが多い。
- 2 文系の方が理系より日本語力が高いと判断されている。特に理学を専攻する学生は、指導教官から日本語力が高いと判断されることが少ない。
- 3 漢字圏の学生が非漢字圏の学生より日本語力が高いと判断されている。
- 4 学生の身分によって日本語力に差があるとは言えない。

3) 指導教官が指導に使用する言語

指導教官が留学生を指導するとき、どの言語を使用するかを日本語・英語・その他の言語の中から複数回答可で選んでもらった。一人一人の留学生の指導について尋ねたた

め、回答は指導教官の数よりも多い。

全体的に見ると、データを得られた232人のうち155人(66.8%)が日本語のみで指導しており、このグループが一番多い(表4)。残りの77人(33.2%)中、日本語と外国語を併用しているのは36人(15.5%)、外国語のみで指導しているのが41人(17.7%)である。外国語を使用するかどうかについて文系・理系では有意差があり($P < 0.01$, χ^2 検定)、理系の方が外国語を使用する率が高い。

表4 指導教官が指導に使用する言語(文理差)

		文系		理系		全体				
日本語のみ		60(87.0%)		90(61.2%)		155(66.8%)				
外国語使用	日本語・英語併用	9 (13.0%)	5 (7.3%)	57 (38.8%)	25 (17.0%)	77 (33.2%)	32 (13.8%)			
	日本語・ その他の外国語併用		7 (10.1%)		1 (1.4%)		26 (17.7%)	0 (0%)	36 (15.5%)	2 (0.9%)
	日本語・英語・ その他の外国語併用				1 (1.4%)			1 (0.7%)		2 (0.9%)
	英語のみ		2 (2.9%)		2 (2.9%)		31 (21.1%)	30 (20.4%)	41 (17.7%)	40 (17.2%)
	その他の外国語のみ				0 (0%)			1 (0.7%)		1 (0.4%)
合計		69(100.0%)		147(100.0%)		232(100.0%)				
文系・理系の差		P < 0.01 (日本語のみと外国語使用)								

4) ゼミ、卒論・修論、学会発表の言語の比較

留学生が体験する口頭発表の場としてはゼミ、卒論・修論、学会があり、それぞれ発表の長さや質疑応答の時間が違っていることがわかっている。これらは性質も異なっているため、指導教官の希望する言語や、実際に使われる言語にも違いがあるはずである。ここでは、これらの3つの場面の違いを見ていく。

a. ゼミ、卒論・修論、学会発表について指導教官の希望する言語の比較

指導教官(133人)が留学生に口頭発表で使用してほしいと思っている言語を選んでもらった。問いは、a. 必ず英語で、b. できれば英語で、c. 英語・日本語どちらでもいい、d. できれば日本語で、e. 必ず日本語で、f. その他、の中から選ぶものだったが、回答はaとbを合わせ英語希望、cを日・英語希望、dとeを合わせ日本語希望としてまとめた。

その結果、指導教官が卒論・修論、学会の3つの場面で学生に使ってほしいと思っ

ている言語には偏りがある傾向が見られた ($P=0.07$, χ^2 検定, 図5)。ゼミや卒論・修論では日本語を希望する指導教官が一番多いが、ゼミ、卒論・修論、学会と進むにつれて、日本語希望の率が減り、日本語でも英語でもいいとする教官が増える。学会発表では日英どちらでもいいとする教官が一番多くなっている。英語のみを希望する指導教官は一貫して非常に少ない。

文系と理系の違いを見ると、全体的に文系の教官のほうが日本語を希望する率が高く、理系では日本語でも英語でもよいとする率が高くなっている。英語のみを希望する教官は文系にはなかった。ゼミ、卒論・修論、学会という3つの場面を比較すると、どちらもこの順に日本語を希望する率が減り、日英どちらでもよいとする率が増える (理系のみ有意差あり $P < 0.05$, χ^2 検定)。

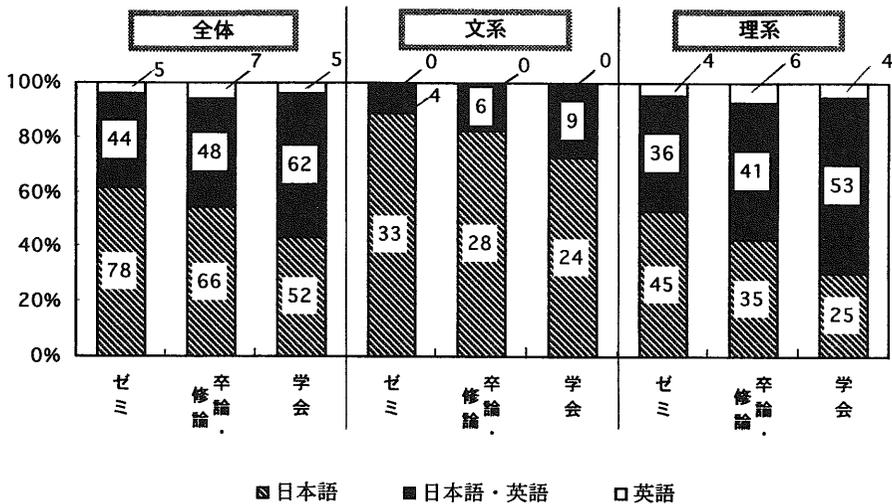


図5 三つの場面で指導教官の希望する発表言語 (文理差)

b. ゼミ、卒論・修論、学会で留学生が実際に使用する発表言語の比較

留学生がゼミ、卒論・修論、学会で発表に使用する言語について見る。どの場面でも、日本語のみを使用する留学生が半数以上であった (図6)⁵⁾。

卒論・修論発表では、ゼミに比べて外国語のみの使用者が増えて、日本語使用者が減っている。また、日本語、英語を併用する人の数が他の場面と比べ少ない⁶⁾。学会発表は卒論・修論より日本語のみを使用する人の割合が低く、英語と日本語を両方使う人が増えている ($P < 0.05$, χ^2 検定)。この場合の両方使うの意味がはっきりしないが、経験的には学会の種類によって、日本語を使用する場合と英語を使用できる場合を分けているのではないかと思われる。

文系ではどの場面でも日本語のみの使用率は高く83.1%から94.7%に達し、理系と比較すると有意に高い。また、ゼミ、卒論・修論、学会発表の順で、日本語のみの使用率が高くなる。理系では、前述の順で、日本語のみの使用率が少なくなる。

この結果と、本研究の「IV.2.4) a. ゼミ、卒論・修論、学会発表について指導教官の希望する言語の比較」とで得られた結果とを比べてみると、文系では指導教官にどちらでもよいと言われると日本語を使用し、理系ではどちらでもよいと言われるでも英語を選択する傾向が強いことが分かる。

指導教官の判断による留学生の日本語力の判定では、文系の学生は理系の学生に比べて高い日本語力を持っていた。学会の発表が文系が理系の倍の長さであったとしても、文系の学生は日本語で発表するのが当然の雰囲気なのかもしれない。それに対して、理系では日本語が不得意な留学生の割合が文系より高い。学会のように公式なものほど英語の発表が許されているとすれば、英語を使用して発表する留学生の率が上がるのだと思われる。

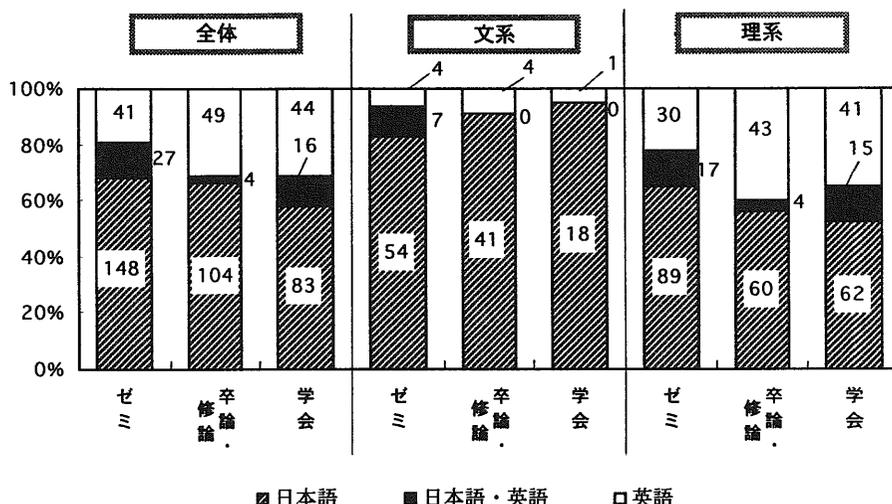


図6 三つの場面で留学生が使用する言語 (文理差)

c. ゼミ、卒論・修論、学会発表言語の比較のまとめ

以上、指導教官が希望する発表言語、留学生が使用する言語を、ゼミ、卒論・修論、学会発表という3つの場面に分けて比較した結果、次の点があった。

指導教官の希望する使用言語については、

- 1 3つの場面で日本語のみの使用を希望する教官が一番多かった。
- 2 文系・理系ともゼミ、卒論・修論、学会の順で日本語でも英語でもよいとす

る率が上がった。

留学生の実際に使用している言語については、

3 3つの場面で日本語のみを使用する留学生が一番多かった。

4 文系のほうが理系よりも日本語のみの使用率が高かった。

5 文系ではゼミ、卒論・修論、学会の順で日本語のみの使用率が上がり、理系では外国語の使用率が上がる。

5) 卒論・修論発表に使用される言語

留学生が口頭発表で使用する言語を決定するのに影響を及ぼす要因を調べるため、卒論・修論発表の場に注目して分析する。卒論・修論発表は、我々が注目しているフォーマルなスタイルで行われる発表の場であり、学生が身近に体験する場だからである。

留学生が卒論・修論発表に使用した言語について日本語・英語・その他の言語の中から複数回答を許す形式で指導教官に選んでもらった。留学生256人一人一人について尋ねたが、回答を得られたのは157人であった。回答数が少ないのは、本研究の「IV.1.3) 卒論・修論発表の実態」からも明らかのように、卒論・修論発表を行わない留学生がかなりいるからである。

結果を見ると、卒論・修論で日本語および英語以外の言語を使う留学生はいなかった。そこで、日本語のみを使用するグループ(104人, 66.2%)と、英語を使用するグループ(53人, 33.7%)の二つに分けた。これは、ちょうど留学生の3分の2が日本語だけを使用して発表し、残りの3分の1が何らかの形で英語を使用して発表したことを示している。英語を使用するグループはさらに英語のみを使用する49人(全体の31.2%)と、日本語と英語を併用する4人(全体の2.5%)に分けられた。

a. 指導教官が見た留学生の日本語力と卒論・修論発表に使用される言語

指導教官が判断した留学生の日本語力のレベルと卒論・修論発表の言語の関係を調べた結果を表5に示した⁷⁾。これを見ると、日本語が「上手」な人ほど日本語で発表しており、使用言語は日本語力と関係があることが分かる。日本語が「上手」な人の91.0%、「まあまあ」の人の56.6%、「下手」と判断される人の28.6%が日本語のみを使用しており、その比率には有意差があった($P < 0.01$, χ^2 検定)。

b. 文系と理系の差と卒論・修論発表に使用される言語

卒論・修論発表で使用される言語が文系と理系で違うかどうかを見る。データのそろっている152人について分析すると、表6に示したように、日本語のみを使用

する率が文系で90%以上で多く、理系(51%)との間に有意な差があった($P < 0.01$, フィッシャーの直接確率法)。

「IV. 2. 2) 留学生の日本語力の文理差」の分析で、文系のほうが理系よりも上と判定される率が高いことがわかっているが、卒論発表の使用言語の差に日本語力の差がそのまま現れている可能性もある。

表5 卒論・修論に使用される言語 (指導教官の判断による日本語力の違いによる差)

	「上手」	「まあまあ」	「下手」
日本語のみ使用	61(91.0%)	30(56.6%)	8(28.6%)
日・英語併用 英語のみ使用	6(9.0%)	23(43.4%)	20(71.4%)
合計	67(100.0%)	53(100.0%)	28(100.0%)

表6 卒論・修論発表に使用される言語 (文理差)

	文系	理系
日本語のみ使用	41(91.1%)	60(56.1%)
日・英語併用 英語のみ使用	4(8.9%)	47(43.9%)
合計	45(100.0%)	107(100.0%)

c. 専門と卒論・修論発表に使用される言語

次に、専門による使用言語の特徴を両方のデータのそろう157人について調べた⁸⁾(表7)。文系の文学、法学、経済では「日本語のみ」の使用が85%以上と高く、これらに有意差はなかった。文系と理系が混じる教育学部では全員が日本語のみで卒論・修論の発表を行っている。理系の医学系・薬学部・工学部は文系に比べて低く、50%から60%台であった。理系でも理学を専門にしている学生は日本語のみの使用が特に少なく、文系だけでなく、医学系($P < 0.05$)、工学($P < 0.01$)と比較しても有意に少なかった(分析は、フィッシャーの直接確率法または χ^2 検定)。

表7 卒論・修論に使用される言語（専門の違いによる差）

	文学	法学	経済	教育	医学系	薬学	工学	理学
日本語のみ使用	8 88.9%	6 85.7%	13 86.7%	19 100%	14 53.8%	4 57.1%	38 63.3%	2 14.3%
日・英語併用 英語のみ使用	1 11.1%	1 14.3%	2 13.3%	0 0%	12 46.2%	3 42.9%	22 36.6%	12 85.7%
合計	9 100.0%	7 100.0%	15 100.0%	19 100.0%	26 100.0%	7 100.0%	60 100.0%	14 100.0%

専門が理学の留学生は、他の専門に比べ日本語のみの使用率が低い。また、本研究の「IV.2.2）.b.留学生の日本語力の専門分野による差」によると、留学生の日本語力が指導教官によって、「上手」と判定される率が低いという点で他の理系の分野と違う。理系でも、医学系・工学系などは実学的な要素が強く、一般の会社や病院との結びつきを必要とする分野であるので、日本語も必要である。これに対して、理学は理論的な要素が強く、この分野での研究者間で通じる英語ができるなら、必ずしも日本語は必要ではないのかもしれない。

d. 身分と卒論・修論発表に使用される言語

留学生の身分と卒論・修論に使用される言語との関係を見ると（157人分、表8）、大学院後期よりも前期、その他の順に「日本語のみ」を使用する学生の割合が多くなる。これらの比率には有意差があった（ $P < 0.01$, χ^2 検定）。大学院後期の学生が一番「日本語のみ」の使用が少ないことは注目される⁹⁾。

表8 卒論・修論に使用される言語（身分の違いによる差）

	大学院後期	大学院前期	その他
日本語のみ使用	50(55.6%)	35(79.5%)	19(82.6%)
日・英語併用 英語のみ使用	40(44.4%)	9(20.5%)	4(17.4%)
合計	90(100.0%)	44(100.0%)	23(100.0%)

e. 指導教官の希望する発表言語と卒論・修論発表に使用される言語

回答のあった121人の教官のうち、日本語を希望する教官が66人（54.5%）で

一番多く、日本語・英語両方どちらでもよいとする教官が48人(39.7%)、英語がよいとする教官は7人(5.8%)と非常に少なかった。

文系では大多数の教官が日本語を望んでいるが、理系では半数がどちらでもよいと答えており(表9)、文理で希望する言語が異なるという結果が出た($P < 0.01$, χ^2 検定)。

表9 指導教官の希望する発表言語(文理差)

		文系		理系		全体	
指導教官 の希望	日本語のみ使用	28(82.4%)		35(43.2%)		66(54.5%)	
	その他	日・英語 両方可	6(17.6%)	46(56.8%)	41(50.6%)	55(45.5%)	48(39.7%)
			英語使用		0(0.0%)		5(6.2%)
	合計		34(100.0%)		81(100.0%)		121(100.0%)

専門が文系である学問領域では、扱われる内容が日本文化そのものであったり、日本の文学であったり、日本人であったりする場合が多い。このような内容を研究するにあたっては、日本語で研究するほうが都合がいいのであろう。これに対し、理系の専門領域では、扱う内容が日本に関するものに限定しないいわば世界共通のものになっている可能性が高い。そうした分野では発表言語を必ずしも日本語に限る必要はないのかもしれない。

次に、指導教官の意向と留学生が卒論・修論発表で実際に使用している言語との関係を見る(表10)¹⁰⁾。日本語で発表を奨められている学生、日本語・英語のどちらでもよいと言われている学生、英語が推奨されている学生、の順で日本語のみの発表が少なくなっている($P < 0.01$, χ^2 検定)。学生の発表言語に教官の意向が影響を及ぼしていることが分かる。

しかし、日本語が推奨されている学生の17.5%が英語のみを使用していること、英語が推奨されている学生でも2人は日本語のみで発表している点には注意しなければならない。日本語や英語の能力の問題で、指導教官の意向に添った言語で発表できない学生がいるのである。

表 10 指導教官の希望言語と留学生が卒論・修論発表で実際に使用している言語

		留学生が卒論・修論発表で実際に使用している言語			合計
		日本語のみ使用	日英語両方使用	英語のみ使用	
指導教官の希望言語	日本語のみ希望	64(80.0%)	2(2.5%)	14(17.5%)	80(100.0%)
	日・英語両方可	37(53.6%)	2(2.9%)	30(43.5%)	69(100.0%)
	英語希望	2(28.6%)	0(0%)	5(71.4%)	7(100.0%)
合計		103(66.0%)	4(2.6%)	49(31.4%)	156(100.0%)

f. 卒論・修論の発表言語のまとめ

これまで、卒論・修論の発表言語を決める要因として、文系・理系の別、専門、学生の身分、指導教官の希望する言語、日本語力の5つについて検討してきた。その結果次のことが分かった。

- 1 日本語だけで発表している留学生の割合は、文系のほうが理系より多い。
- 2 専門が教育の留学生は日本語だけで発表する率が高く、専門が理学の留学生は英語を使う率が高い。
- 3 大学院後期の留学生が日本語のみで発表する率が一番低く、次に大学院前期の留学生が低く、その他の留学生は日本語のみで発表する率が一番高い。
- 4 指導教官の希望する言語が日本語である場合は、日本語のみで発表する留学生の割合が多い。
- 5 指導教官の判定した日本語力が上の留学生ほど日本語だけで発表している。
- 6 文系・理系の別、専門、学生の身分、指導教官の希望する言語、日本語力、以上検討した全ての要因が、留学生が卒論・修論の口頭発表するときによどのような言語を使うかに関係している。

しかし、これらの要因同士がどう関係しているのかは、分からない。また、卒論・修論の口頭発表の言語を決める要因としてどれが強く、どれが弱いのかについて知るためには、更に分析を進めなければならない。

V まとめと今後の課題

この論文では、専門分野で行われている口頭発表の実態を形態的な側面、言語的な側面から調べた。

第一に分かった点は、専門の口頭発表における日本語の必要性が大きいことである。指導教官の指導に使用される言語、留学生に希望する発表言語、留学生が実際に使う言

語も日本語のみという場合が多かった。口頭発表のための日本語は必要とされている。

第二には、文系は日本語力・日本語での発表の必要性が高く、理系と差が大ききことである。また、文系・理系の差だけでなく専門分野によっても日本語の必要度が違うことが分かった。日本語教師は文系・理系の差、専門の差に応じた指導を工夫していかなければならない。

第三としては、ゼミ、卒論・修論、学会の口頭発表はその長さや回数だけでなく、指導教官の希望する言語や留学生が発表に使用している言語にもそれぞれ特徴があつて、同じではないことが分かった。日本語教師が留学生に口頭発表の援助をする場合も、これらの違いに注意して指導に当たる必要がある。

第四に、留学生が卒論・修論の口頭発表で使用する言語は、日本語力、文系か理系の別、専門、身分の違い、指導教官の希望する言語などに関係していることが分かった。しかし、要因同士の関係のしかたや、強弱について分析することができなかった。今後はそれを追求していく必要がある。

【謝 辞】

事前のインタビューやアンケートに、貴重な時間を割いて快く答えてくださった留学生の指導教官の皆様
に感謝いたします。また、アンケート作成方法、統計的な検定方法について多くのアドバイスをくださった金
沢大学留学生センターの岡澤孝雄先生に感謝いたします。

【注】

- 1) 調査した指導教官に自分が文系か・理系か・その他かを選んでもらった。そのため、例えば教育学部は文系・理系・その他の分野の教官が存在する。また、無答もあるので文系と理系の合計が全回答数と異なる。以下文系・理系というときは同様の意味で使っている。
- 2) 今回の調査では各学部や各学科で口頭発表が義務かどうかや、発表言語に規定があるかどうかについて、詳しく聞くことができなかった。
- 3) 漢字圏出身者と非漢字圏出身者それぞれの文系・理系の割合に有意差はない。
- 4) ここで言う「外国語」は、英語と「その他の外国語」を含めている。「その他の外国語」の内訳は、ロシア語(1人)、中国語(1人)、タイ語(1人)、不明(2人)であった。
- 5) その他の言語が選択されたのはゼミで2人のみと、わずかであったため、留学生の使用言語を分析する際も指導教官の使用言語のグループ分けと同様にした。
- 6) ただし、一つの発表の中で日本語と英語を併用したのか、卒論と修論を別の言語で行ったのかについてはわからない。
- 7) この結果は、日本語力と卒論・修論の発表言語の両方の回答が得られた148人だけについて分析している。
- 8) 個々のセルに入る度数が少ないので、表全体の統計的な検定はできない。このため、専門同士を個別に比較し、検定した。
- 9) この場合、大学院後期の学生は、修論発表・卒論発表のときを思い出して回答されたか、博士論文の発表言語を想定して回答されたかははっきりしない。同様のことは他の身分の学生についても言える。

- 10) 留学生一人一人につき、実際に 卒論・修論発表のとき使用している言語と、担当の指導教官が希望している言語を比較している。また、この両方のデータがそろった留学生 156 人のみ分析の対象になっている。

【参考文献】

- 尾崎明人 (1994) 『日本語研修コース修了生追跡調査報告書 1994』名古屋大学留学生センター
- 尾崎明人 (1996) 『日本語研修コース修了生追跡調査報告書 2・1994』(文部省科学研究費基盤研究 (B) (2) 課題番号 07458049), 名古屋大学留学生センター
- 尾崎明人 (1998) 『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究—日本語研修コース修了生追跡調査報告書 3—』(文部省科学研究費補助基金基盤研究 (B) (2) 課題番号 07458049), 名古屋大学留学生センター
- 黒野敦子 (1994) 「研究生活で必要とされる日本語能力と留学生の実態」『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究—日本語研修コース修了生追跡調査報告書—』39-49.
- 小林浩明 (1994) 「日本語使用の実態」『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究—日本語研修コース修了生追跡調査報告書—』尾崎明人, 11-27.
- 庄司恵雄 (1994) 『大学院研究留学生の日本語使用実態に関する調査報告書』岡山大学
- 仁科喜久子 (1991) 『理工系留学生の日本語学習および能力に関する実態調査報告』東京工業大学
- 三浦香苗 (1998) 「初級段階の口頭発表プロジェクト—受信から発信へ—」平成 10 年度 日本語教育学会秋期大会予稿集, 日本語教育学会, 61-66.
- 三浦香苗・島弘子・古本裕子・早川幸子 (1999) 「専門教育における留学生の口頭発表 (1) 指導について」『金沢大学留学生センター紀要』VOL.2
- 村上京子 (1998) 「質問紙調査による結果の概要」『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究—日本語研修コース修了生追跡調査報告書 3—』尾崎明人, 7-21.

Oral Presentations given by International Students in their Major Field of Study : Language Utilized

Yuko Furumoto, Yukiko Hayakawa,
Hiroko Shima, and Kanae Miura

ABSTRACT In order to determine the actual state of language utilization when international students give oral presentations on their specialization, we analyzed information obtained through questionnaires sent to the students' supervisors at Kanazawa University. The results of the analyses are summarized as follows: 1) In many cases Japanese is used exclusively. This was the case when: supervisors advise their international students (66.8%); the supervisors recommend the language to be used in graduate and master's theses presentations (54.5%); students gave the actual presentation (66.2%). 2) A higher percentage of liberal arts students (91.1%) used solely Japanese in their presentations as compared to students in the sciences (56.1%). The rates also varied depending on the student's faculty. 3) Whether or not supervisors recommended use of Japanese was found to depend on the occasion with the rates for seminars, graduate or master's theses presentations, academic meetings being 61.4%, 54.5%, and 43.7%, respectively. 4) However, the rates of actual Japanese usage in students' presentations differed from the recommendations; the actual

rates in the three examples being 68.5%, 66.2%, and 58.0%. 5) The factors controlling the language used by international students in oral presentations of their graduation thesis are: Japanese ability; their academic area (liberal arts or science); their major; the status of the student (master's course, doctoral course, or other); and suggestion made by the supervisor.